指示機能をもつ程度副詞に見られる制約について

—「こんなに」「あんなに」「そんなに」を例に—

林奈緒子

0　はじめに

指示機能をもつ程度副詞[1]は、以下に見られるような出現制約をもつ。

(1)　＊(僕は) こんなに具合が悪い。

(2)　　こんなに具合が悪いのに、仕事に行かなきゃいけないなんて。

(1) が許容できないのに対して、(1) を従属節にもつ文である (2) は問題なく許容される。本稿では、指示機能をもつ程度副詞に見られる文への出現制約について、「こんなに」「あんなに」「そんなに」を例として説明を試みる。

1　指示機能をもつ程度副詞と文のタイプ

指示機能をもつ程度副詞の出現制約について、まず文のタイプとの関わりという観点から検討する。ここでいうところの「文のタイプ」とは、伝統的には「平叙文・疑問文・命令文・感嘆文」とされる別、仁田 (1989) で「発話・伝達のモダリティ」、益岡 (1991) で「表現類型のモダリティ」と言われているものにあたる[2]。以下の例に見られるとおり、「こんなに」「あんなに」が出現するの

[1] ここでいう「指示機能をもつ程度副詞」とは、コソアを伴って指示機能を備えつつ、相対的状態性述語を修飾する語である。具体的には、本稿で取り上げる「こんなに」「そんなに」「あんなに」や「これほど」「それほど」「あれほど」が挙げられる。なお、「そんなに」は否定文に出現したときに指示機能を失う。したがって、否定と呼応した「そんなに」は、本稿での分析の対象としない。

[2] 益岡（1991）でも述べられているとおり、益岡の分類は仁田（1989）に基づくものであるが、仁田ではいわゆる感嘆文が分類に含まれていないのに対して、益岡では感嘆文を「感嘆型」として位置づけている。本稿での分析が感嘆文にも関わるものであるため、主に益岡の分類に従って論を進める。

は益岡のいう「演述型」「感嘆型」の文に限られる。

(3) 彼の部屋はこんなに汚い。「演述型」

(4) ＊ (僕は) こんなに具合が悪い。「情意表出型」

(5) ＊こんなに食べろ。「訴え型」

(6) ??彼の部屋はこんなに汚いの？「疑問型」

(7) 彼の部屋がこんなに汚いなんて！「感嘆型」

益岡によると、「演述型」は「話し手の知識 (広義のもの) を聞き手に情報として提供するという働きを有する」(益岡 (1991)p79) ものである。「演述型」の文に出現するというところから[3]、次のような仮説を導くことができよう。

(8) 「こんなに」「あんなに」は、話し手の側から聞き手に情報を提示する文に出現する。

(8) の仮説にしたがえば、「演述型」のみならず「情意表出型」の文にも「こんなに」「あんなに」が出現することとなる。「情意表出型」もまた「表現時において話し手の感情・感覚や意志の内容を情報として聞き手に伝える」(益岡 (1991)p80) 文であり、話し手の側から聞き手に情報を伝えるという意味では (8) の仮説のうちにおさまるタイプの文である。「情意表出型」に「こんなに」「あんなに」が出現しないのは、第 2 節で論じる述語句の意味との関わりによるものである。したがって、「情意表出型」に「こんなに」「あんなに」が出現しないという事実は (8) の反証となるものではない。

(8) の仮説に関わると思われる現象として、終助詞「よ」「ね」との共起制限が存在する。

(9) 彼の部屋はこんなに汚い。 cf. 彼の部屋は汚い。

(10) 彼の部屋はこんなに汚いよ。 cf. 彼の部屋は汚いよ。

(11) ＊彼の部屋はこんなに汚いね。 cf. 彼の部屋は汚いね。

[3] 「こんなに」「あんなに」が「感嘆型」の文に出現するという問題については、「そんなに」が「感嘆型」の文に出現しないという問題と共に、後述する。

(9)(10) の文が許容されるのに対して、(11) の文は許容されない。また、(9)(10) の文は共に自然な文として許容されるものの、(9) の文に比べて (10) の文の方が座りがよいように感じられる。相対的な許容度は、(10) の方が高いといえよう。まず、(10) と (11) についてであるが、(10)(11) の違いというのは、終助詞「よ」と「ね」の違いに還元できる。益岡 (1991) によると、「ね」が話し手と聞き手の内部世界のあり方の一致性を表す形式であるのに対して、「よ」は話し手と聞き手の内部世界のあり方の対立性を表す形式である。益岡 (1991) では、「演述型」において「ね」が用いられるのは「話し手の知識と聞き手の知識が基本的に一致すると判断される場合」(益岡 (1991)p96) であり、「よ」が用いられるのは「両者の間にずれがあり、その意味で両者に対立的な関係があると判断される場合」(同 p96) であるとする。したがって、(10) が自然な文として許容されるのに対して (11) が許容されないという上記の現象から、(8) の仮説には訂正が加えられる必要が生じる。

(12)　「こんなに」「あんなに」は、話し手が話し手と聞き手との間で知識の一致が認められないと判断した情報を聞き手に提示する文に出現する。

(9) と (10) の相対的な許容度の差という問題も同様の立場から説明可能である。(10) が情報が話し手から提示されているものであることをマークしている有標の文であるのに対して、(9) は情報の所在に対して、いわば無標な文である。(12) に挙げた仮説が成立しているからこそ、(9) と (10) のような許容度の相対的な違いも認められるのである。また、(8) の仮説が (12) のように訂正されることによって、「こんなに」「あんなに」が「情意表出型」の文に出現しないことへの理由も与えられる。話し手の感情・感覚あるいは意志が、話し手と聞き手との間で一致・不一致を問いうる知識たりえないからである。とはいえ、「こんなに」「あんなに」が「情意表出型」に出現しえないのは、先述したとおり述語句の意味という問題にも関わっている。第 2 節での議論が併せて考慮される必要がある。

一方、「そんなに」の出現を許すのは、「疑問型」の表現類型のモダリティをもつ文のみである。

(13) ＊彼の部屋はそんなに汚い。「演述型」

(14) ＊ (僕は) そんなに具合が悪い。「情意表出型」

(15) ＊そんなに食べろ。「訴え型」

(16)　彼の部屋はそんなに汚いの？「疑問型」[4]

(17) #彼の部屋がそんなに汚いなんて！「感嘆型」[5]

「演述型」が「話し手の知識 (広義のもの) を聞き手に情報として提供するという働きを有する」ものであったのに対して、「疑問型」は「聞き手の方が知識をより多く持っていると想定される場合に、聞き手に情報の提供を要求する働きを持つもの」(益岡 (1991)p80) である。よって、以下のような仮説が導き出される。

(18) 「そんなに」は、聞き手の側に情報の提示を要求する文に出現する。

「こんなに」「あんなに」「そんなに」はいずれも指示機能をもつ程度副詞であり、指示対象の存在を必要とする。「こんなに」「あんなに」「そんなに」がいずれも指示対象を必要とする程度副詞でありながら、(12)(18) の仮説に示したように異なった出現制約をもつという事実は、コソアの問題に還元しうる。「こんなに」「あんなに」におけるコ・アはそれぞれ、話し手の領域に属するもの／こと、話し手・聞き手双方の領域に属するもの／ことを指示する。「演述型」の文において「こんなに」「あんなに」の出現が可能であるのは、コ・アのもつこの意味による。一方の「そんなに」が「疑問型」の文に出現するのもソの意味によるものである。ソは聞き手の領域に属するもの／ことを指示する。聞き手に属する指示対象をソで指示しながら聞き手にその程度を尋ねることはあっても、話し手に属する指示対象をコで指示しながら聞き手にその程度を尋ねることは不可能であろう。

また「感嘆型」の文に出現するのは、「こんなに」「あんなに」に限られてい

[4] 「そんなに」の出現が許容されるのは、「疑問型」の文の中でもノダ文に限られる。これについては「前提」との関わりという観点から後に考察を加える。

[5] (17) の文は、文としては許容されるが、それは聞き手の存在を想定している場合に限られる。聞き手の存在を想定した場合は、当の文はもはや「感嘆型」の文とはいえず、「演述型」に分類される。#は当の文が許容されないことを示すものではなく、「感嘆型」の文とは認められないことを示す。なお、(17) を「演述型」の文に分類すると、「そんなに」は「演述型」の文にも出現するということになるが、(17) が「演述型」の文として許容される要因としては第 3 節で扱う「前提」という問題が関与している。

た (例 (7)(17) を参照)。「感嘆型」の文に「そんなに」が出現しないのは、「感嘆型」が聞き手の存在を想定しない文 (益岡 (1991) ではこれを「特定の聞き手に対する伝達という面を持たない」「非対話文」として位置づけている) だからである。聞き手の存在を想定しないのであるから、聞き手の領域に属する指示対象を指すソが用いられるはずはない。また「こんなに」「あんなに」が「感嘆型」の文に出現した時というのは、「演述型」の文に出現した時とはその指示のあり方を異にする。「演述型」は話し手の側から聞き手に情報を提示する文であるので、「演述型」の文に出現した「こんなに」「あんなに」の指示対象は発話の場に存在する話し手と聞き手との間で共有可能なもの／ことである。しかし、「感嘆型」というのは聞き手の存在を想定しない文であるので、指示対象も聞き手との間で共有可能である必要がない。したがって、「感嘆型」の文に出現した「あんなに」のアは、話し手・聞き手双方の領域に属するもの／ことを指示対象とするのではなく、話し手の過去の経験を表すアに限られる。

(19)　彼の部屋があんなに汚いなんて！

(19) の「あんなに」が指す程度は発話の場に存在するのではなく、話し手が過去に経験した事態に存在した程度である。

以上で確認したとおり、指示機能をもつ程度副詞「こんなに」「あんなに」「そんなに」は、コソアの違いによって文への出現制約に関して異なりを示す。「こんなに」「あんなに」は、話し手から聞き手に情報を提示することが可能な「演述型」の文に出現し、話し手によって提示される程度を表す。この場合、指示される程度は発話の場に存在し話し手・聞き手の間で共有可能なものである。「こんなに」「あんなに」はまた、「感嘆型」の文にも出現するが、「感嘆型」は聞き手というものを想定しない文であるが故に、「こんなに」「あんなに」によって指示される程度は話し手にさえ了解されていればよい。そのため、「あんなに」の指示対象は発話の場を離れることが可能となり、話し手が過去に経験した事態に見られる程度を表すこととなる。一方「そんなに」は、「感嘆型」が聞き手を想定しない文であるという同じ理由からこのタイプの文には出現しない。聞き手の領域に属するもの／ことを指示するソの性質と相容れないためである。「そんなに」が出現するのは「疑問型」の文に限られる。

2 修飾先述語に見られる制約

前節で見たとおり、「こんなに」「あんなに」は「演述型」「感嘆型」の文
「そんなに」は「疑問型」の文にのみ出現するという制約をもつ。指示機能
つ程度副詞の出現した文の許容度は、文のタイプという要因の他に、述語
意味によっても左右される。本節では、この点について考察を加えたい。

(20) a. 彼の部屋はこんなに汚いよ。

b. 今日はこんなに空が青いよ。

c. この花はこんなにきれいだよ。

d. この部屋はこんなにうるさいよ。

e. ?この本はこんなに面白いよ。

f. ?このワインはこんなに美味しいよ。

(20) に挙げた例はいずれも「こんなに」が「演述型」の文に出現したも
あるが、その許容度に差が見られる。(20a) ~ (20d) は自然な文として許容
るが、(20e) ~ (20f) は許容しにくい。この許容度の違いは、(20a) ~ (20d
おいては、その指示対象が話し手と聞き手との間で共有されうるものであ
に対して、(20e) ~ (20f) においては、指示対象が共有されえないというこ
ら生じているものと考えられる。(20e) の「この本の面白さ」とは、その
読んでみなければ共有できないものであり、(20f) の「このワインの美味し
は、そのワインを味わってみなければ共有できない。

第1節で、「こんなに」「あんなに」は「情意表出型」の文には出現しな
とに言及した。

(21) a. ＊僕はこんなに頭が痛い。

b. ＊僕はこんなに眠い。

話し手と聞き手との間で共有できないものとして、感情・感覚は一つの
なしている。(21) に挙げたように、話し手の感情・感覚の程度は「こんな
の指示対象とはなりえない。一方の聞き手の感情・感覚もやはり話し手に
有不可能であるが、「疑問型」である (22) の文には「そんなに」が出現す

(22) a.　君はそんなに頭が痛いの？　cf. ＊君はそんなに頭が痛い？

b.　君はそんなに眠いの？　cf. ＊君はそんなに眠い？

「そんなに」によって聞き手の感情・感覚の程度を指示できるのは、その指示対象が聞き手によって発話以前に示されているときのみである。すなわち、(22a) が発話可能なのは、聞き手が頭の痛さを訴えているときである。したがって、参考に挙げたノダを伴わない文は許容されない。

このように、「こんなに」「あんなに」が修飾する述語句の意味によって、「こんなに」「あんなに」が出現した文が許容されやすいかどうかが決まる。視覚によってその指示対象が確認できるものは話し手・聞き手の間で共有されやすい ((20a)(20b)(20c))。また聴覚によって指示対象が共有される (20d) のような場合もある。指示対象の共有のされ方は異なっているが、重要なのはどのような手段によって指示対象が共有できるかということではなく、指示対象の共有が可能であるということである[6]。したがって、感覚形容詞「痛い」も、次のように文脈を補えば許容されよう。

(23) (AがBを叩いて)

A：(痛がっているBに)　そんなに痛かった？

B：(Aを叩き返して)　ほら、こんなに痛い。

分類としては絶対的なものではなく、文脈を補えば (23) のように許容できる文となるが、「こんなに」「あんなに」が共起したときの許容度の差という観点から見ると、次に挙げる (24)(25) に比べて、(26) に挙げるいわゆる感情・感覚形容詞は「こんなに」「あんなに」とは共起しにくい。第 1 節において確認したように、「情意表出型」の文が「話し手から聞き手に情報を提示する文」でありながら「こんなに」「あんなに」の出現を許容しなかったのは、「情意表出型」の文における述語句が感情・感覚形容詞であることとも関わっている。

[6] 例えば、「今日はこんなに寒いよ。」という文は、次のいずれの文脈においても許容される。

(a) 寒暖計を指しながら
(b) 凍った水たまりを指しながら
(c) 「はーっ」と白い息を吐きながら

(24) 視覚・聴覚などによって、指示対象が共有されやすいもの
美しい, 可愛い, 汚い, 若い, 新しい, 古い, 白い, 黒い, 赤い, 清潔だ, 不潔だ, 新鮮だ, 汚れている, うるさい, にぎやかだ, 臭い　など

(25) 計器の存在が想定できるもの[7]
寒い, 暑い, 冷たい, 熱い, 高い, 低い, 太い, 細い, 重い, 軽い, 速い, 遅い, 長い, 短い, 深い, 浅い, 硬い, 軟らかい, 厚い, 薄い　など

「暗い, 明るい, 狭い, 広い, 遠い, 近い, 澄んでいる, 濁っている, 曲がっている」なども (25) に含めてよいかもしれない。

(26) 感情・感覚を表すもの
痛い, 悲しい, 嬉しい, 楽しい, 美味しい, 不味い　など

先に挙げた「きれいだ」「面白い」などは、(24)(25) のような指示機能をもつ程度副詞と共起しやすい述語句と (26) のように共起しにくい述語句との間に位置づけられよう。

3　前提との関係

第 1 節では、指示機能をもつ程度副詞「こんなに」「あんなに」「そんなに」と文のタイプとの関わりという観点から、指示機能をもつ程度副詞が出現した文の許容度について考察した。本節では、指示機能をもつ程度副詞が出現した文の発話条件を、「前提」との観点から論じてみたい。第 1 節において、「こんなに」「あんなに」の出現が、「話し手が話し手と聞き手との間で知識の一致が認められないと判断した情報を聞き手に提示する文」、典型的には終助詞「よ」を伴う「演述型」の文、あるいは聞き手の存在を想定しない「感嘆型」の文に限られることを指摘した。このうち、聞き手の存在を想定して発せられる「演述型」の文に出現した「こんなに」「あんなに」は、発話の場に存在する事態に見られる程度を指示対象とする。

(27) a.　彼の部屋はこんなに汚いよ。

b.　彼の部屋はあんなに汚いよ。[8]

---

[7] 視覚によって指示対象が共有されるものに含めてよいかもしれない。

[8] (27a) の「こんなに」が出現した文と違い、(27b) の「あんなに」が出現した文は、終助詞「よ」を伴わない場合、指示対象が発話の場になくとも許容可能である。

一方、次に挙げた例 (28) は、同じく聞き手を想定した文であり、複文ではあるが文のタイプとしては「演述型」の文である。しかし、(28) の文はいずれも、発話の場に指示対象が存在しなくとも発話される。

(28) a.　こんなに寒いと体が動かないよ。　(井上 (1992)p14)

b.　彼の論文がこんなに面白いとは思わなかった。　(井上 (1992)p16)

したがって、(28) は (29) のように話し手と聞き手が空間的に隔たっている場合、たとえば電話での会話においても発話される。

(29) a. (話し手と聞き手が電話で話していて)
こっちはすごく寒いよ。こんなに寒いと体が動かないよ。

b. (話し手と聞き手が電話で話していて)
君が話していた論文読んだよ。彼の論文がこんなに面白いとは思わなかった。

(28) の文は、なぜ発話の場に指示対象を必要としないのであろうか。(28) に挙げた文は、それぞれ次のような前提をもっており、「こんなに」「あんなに」はこの前提部分に出現している。

(30) こんなに寒いと体が動かないよ。
前提：「(「こんなに」で表しうる程度) 寒い」(従属節の内容)

(31) 彼の論文がこんなにおもしろいとは思わなかった。
前提：「彼の論文が (「こんなに」で表しうる程度) おもしろい」

(d)　彼の部屋はあんなに汚い。
許容可能であるとしたのは、自然な文として許容されるには、次のような文脈が必要であると思われるからである。

(e)　彼がきれい好きなはずはないよ。(だって) 彼の部屋はあんなに汚い。
これは後述する「こんなに」「あんなに」が「前提」部分に出現した場合に近い文である。「(だって) 彼の部屋はあんなに汚い。」という文は、「彼の部屋が汚い」ということが聞き手の意識にのぼっていなければ発話されない。なお、(e) の文は発話の場に指示対象を必要とはしないが、後述「前提」内に出現する「あんなに」とは異なり、聞き手が指示対象が存在した場にいたことが発話の条件となっている。

また、

(32) キムチってこんなに辛かったっけ？ (井上 (1992)p16)
前提：「キムチが (「こんなに」で表しうる程度) 辛い」

(33) この問題はどうしてこんなに難しいんだろう。
前提：「この問題が (「こんなに」で表しうる程度) 難しい」

も、発話の場に指示対象がなくとも許容される文であろう。

では、前提をもつということと、発話の場の指示対象の有無とは、どのような関わりをもつのであろうか。第 1 節で考察した「演述型」の文を例に考えてみよう。

(34) a. 彼の部屋はこんなに汚いよ。

b. こんなに汚い部屋は見たことがないよ。

(34a)(34b) は共に「演述型」の文であるが、「こんなに」を含む部分の情報としての価値を異にする。(34a) で「こんなに」が出現しているのは「新情報」内であり、この文は発話の場に指示対象が存在して初めて許容される。一方「こんなに」が「前提」内に出現している (34b) は、次のように話し手と聞き手とが空間的に隔たっていても発話されうる。

(35) (妻に電話で息子のアパートの様子を報告している夫が)
ほんとに凄いよ。こんなに汚い部屋は見たことがないよ。

したがって、第 1 節で提示した仮説に加えて、「前提」との関わりという観点から次のような指摘が可能となる。

(36) 「こんなに」「あんなに」は、「前提」内に出現するときはその指示対象が発話の場になくてもよいが、「新情報」内に出現するときは発話の場に話し手と聞き手との間に共有された指示対象を必要とする[9]。

では、「こんなに」「あんなに」が「前提」内に出現するときには指示対象が発話の場になくてもいいのに対して、「新情報」内に出現するときには発話の場

[9] ただし、「感嘆型」の文は聞き手の存在を想定しない文なので、この限りではない。「感嘆型」の文に出現した指示機能をもつ程度副詞が指示する程度は話し手自身に了解されていればよいからである。

に話し手と聞き手との間に共有された指示対象を必要とするのは何故か。

文における「前提」部分というのは、いわば先行文脈を受ける形で先行文脈との間に関わりをもつ部分である。一方、「新情報」部分というのは、先行文脈と関わりをもつ必要がない。中立叙述文を例に説明すると、例えば「空が青い。」という発話は、先行文脈が「空」や「青さ」ということとなんら関係のない場合にも発話されうる。というよりは、「空が青い。」という文が中立叙述文として理解されるためには、当の発話が先行文脈となんら関係のない場合に発話されることがむしろ必要である。また、属性叙述文、例えば「彼の部屋は汚い」の場合、話し手は「彼の部屋」が聞き手において同定可能であることを想定してはいるが、「汚さ」に関しては先行発話で触れられている必要はなく、むしろ先行発話が「(彼の部屋の) 汚さ」と関わりをもたないことが当の発話を自然なものとしている。このように、「新情報」部分が先行発話と関わりをもたない (「新情報」部分に関して、先行発話で言及されていない) ということは、その「新情報」部分に出現した「こんなに」「あんなに」がその指示対象を先行文脈に求めることができないということを意味する。先行文脈に指示対象が求めえないのであれば、それは発話の場に求められるより他ない。「こんなに」「あんなに」が「新情報」部分に出現したときに、発話の場に指示対象が必要となる所以である。

ここで、第 1 節で扱った「そんなに」が出現した「疑問型」の文について再検討を加えたい。

(37)　そんなに悲しいの？

例 (37) において、「そんなに」が指示しているのは聞き手が悲しそうにしているという発話の場に存在する事態に見られる程度である必要はなく、聞き手による先行発話内に見られる程度であってもかまわない[10]。また、先に見た例

(38)　彼の部屋はそんなに汚いの？　(例 (16) を再掲)

では、「そんなに」は発話の場に存在する指示対象を指示しているとは思われない。(38) で「そんなに」が指示しているのは、聞き手による先行発話内の程度である。ソは聞き手の領域に属するもの／ことを指示するので、「そんなに」を

[10] 井上 (1992) に、「『ソンナニ』が『聞き手が関与する事態』を指示する場合、『ソンナニ』によって提示される情報は『聞き手が知っている』『聞き手によって提示された』情報でなければならない」という指摘が見られる。

含む文が許容されるには当の文が発話される以前に聞き手の領域に属するもの／ことが存在しなければならない。第1節でも指摘した「そんなに」がノダを伴わない「疑問型」の文に出現すると不自然になるという現象もこのことと関わっている。ノダ文が「承前性」をもち「言語的な文脈に表れたことがらや会話の状況中の非言語的なことがらを受けたうえで発せられる」(田野村 (1990)p9) のに対して、ノダを伴わない「疑問型」の文は先行文脈のないところで発せられる。ノダを伴わない「疑問型」の文に「そんなに」が出現しないのはこのためである。それでは「疑問型」の文に出現した「そんなに」は先に指摘した「こんなに」「あんなに」が「前提」内に出現した場合と同様に扱われるべきなのかというとそうではない。(37) には「(聞き手が「そんなに」で表しうる程度) 悲しい」という前提は存在していないし、(38) にもまた「彼の部屋が (「そんなに」で表しうる程度) 汚い」という前提は存在していない。このこともまた、ソが聞き手の領域に属すること／ものを指示し、先行文脈が想定されるということによるものである。「こんなに」「あんなに」に見られた発話の場に指示対象が必要であるか否かという別は、「そんなに」においては見られない。

4 まとめ

本稿では、指示機能をもつ程度副詞に見られる文への出現制約、および指示機能をもつ程度副詞が出現した文が発話される条件について、「こんなに」「あんなに」「そんなに」を例として考察を試みた。

まず、文のタイプとの関わりという点から、出現制約について検討を加えた。そこでは、「こんなに」「あんなに」の出現が「話し手が話し手と聞き手との間で知識の一致が認められないと判断した情報を聞き手に提示する文」、すなわち典型的には終助詞「よ」を伴う「演述型」の文および「感嘆型」の文に限られ、「そんなに」の出現が「疑問型」の文に限られることが観察された。この制約は、コソアの別に還元される問題である。

また「前提」という観点から、「前提」内に現れた「こんなに」「あんなに」が発話の場に指示対象を必要としないことにも言及した。「こんなに」「あんなに」が「新情報」内に現れた場合に発話の場に指示対象が必要とされることを併せて考慮し、これを先行文脈の存在の如何によるものであると結論づけた。すなわち、「前提」となっている部分というのは先行文脈と関わりをもつものであり、その「前提」内に出現した「こんなに」「あんなに」は先行文脈内によって指示対象が保証される。一方、「こんなに」「あんなに」が「新情報」内に出

現した場合には、先行文脈に指示対象を求めることができないために、発話の場に指示対象が必要となるのである。

また「そんなに」に関しては、ソが聞き手に属するもの／ことを指示するため、「そんなに」は聞き手によって提示された程度を指示しなければならないとした。そのため、「そんなに」が出現可能な文には先行文脈が存在する。「こんなに」「あんなに」に見られた発話の場に指示対象が存在するか否かという問題は、「そんなに」においては問われない。

以上のように、指示機能をもつ程度副詞の文への出現制約、および発話条件に関して概観をおこない、そこで観察された現象について説明を試みた。記述・説明の不十分な部分も残されているが、今後の課題としたい。

参考文献

井上優（1992）「指示表現を含む副詞成分の一特性――『コ（ソ・ア）ンナニ』を例に――」,『都大論究』29,13-22, 東京都立大学

金水敏・田窪行則（1992）『指示詞』, ひつじ書房

久野 暲（1973）『日本文法研究』, 大修館書店

佐久間鼎（1995）『日本語の特質』, くろしお出版

高見健一（1997）日英語対照による英語学演習シリーズ 4『機能的統語論』, くろしお出版

田中望（1981）「『コソア』をめぐる諸問題」, 日本語教育指導参考書 8『日本語の指示詞』,1-50, 国立国語研究所

田野村忠温（1990）『現代日本語の文法 I』, 和泉書院

仁田義雄（1989）「現代日本語のモダリティの体系と構造」,『日本語のモダリティ』1-56, くろしお出版

益岡隆志（1991）『モダリティの文法』, くろしお出版

三上章（1970）「コソアド抄」,『文法小論集』145-154, くろしお出版

On the restrictions of Japanese adverbs of degree with the function of deixis

Naoko HAYASHI

Adverbs of degree with the function of deixis have certain restrictions on their appearance in sentences. These restrictions are related to two points.

First, there is the question of sentence type. Adverbs of degree with the function of deixis marked by Ko- or A- appear only in assertive or exclamatory sentences. On the other hand, adverbs of degree marked by So- appear only in interrogative sentences. This distinction is related to the differences among Ko- So- A-. In other words, the Ko- So- A- distinction determines the type of sentence in which the adverbs may appear.

Second, there is the question of whether or not the adverb appears in the presupposition part of the sentence. If the adverb doesn't appear in the presupposition part, it requires the deictic referent to be at the scene of utterance. However, if the adverb does appear in the presupposition part, it doesn't require the deictic referent to be at the scene of utterance. This is because if a sentence contains a presupposition and the adverb appears in it, this means the sentence has a preceding context and the deictic referent of the adverb is present in that context. An adverb in the non-presupposition part of a sentence requires the deictic referent to be present at the scene of utterance because of the lack of any preceding context guaranteeing deixis.